

〈修士論文要旨〉

清代鳳山県の族群と社会構造

—漢人と原住民の関係について—

* 森 島 雅 治

今日、現住台湾人を「四大族群」と称し、「本省人」、「外省人」、「客家人」、そして「原住民」に分類されているが、一七世紀中頃のオランダ統治以前には先住民の「原住民」のみが住む島であった台湾が、何故にこのような構成となったかの背景を探りたいと考えた。

清代に入って漢人の移住は爆発的に増え、原住民は押し寄せる漢人に追いつめられて山間部に逃げるか、或いはしだいに漢民族に同化していった。当論文は、現代台湾社会の原点のひとつを清代の鳳山県（現高雄県東部と、屏東県）に求め、「族群社会」、「農地開拓」、「商業発展」、「官の役割」の四つの視点で当時の社会構造を探り、そのモデル化を企図するものである。

第一の視点 族群社会

清国の領有以来、押し寄せる移住漢人は爆発的に増え、必然的に各地で原住民の土地への侵略が頻発した。

漢人の進出に伴い、原住民の中で「熟番」と呼称された漢化が進んだグループと、漢化を嫌い山地に逃げ延びたグループの「生番」とに

分けられる事となった。移民漢人も出身地によって、「閩人」と、「粵人」に大別された。つまり、清代の「四大族群」による社会構成であるが、各族群はそれぞれ相容れる事なく別々の部落を構成していった。これら族群の存在を歴史的に辿りそのルーツを探る事を第一の視点とした。

第二の視点 農地開拓

農業が社会基盤の殆ど全てを構成すると言っても過言では無い一九世紀以前の台湾に於いて、農地開拓と漢人の移民の実態を探る事を第二の視点とした。

農地開拓に要する労力は地理的条件によって大きく異なり、他部落との土地・水利を巡る争いと表裏一体であり、部族間（或いは部落間）での抗争は絶える事がなかった。

「開拓史」とは争いの歴史でもある。

第三の視点 商業発展

移民による漢人勢力が飛躍的に増大するなかで、必然的に商業活動が活発化した。産物交換を中心として始まった小規模の商売は、米・茶葉・樟腦・砂糖等を商品として本土に運ぶ商業として発展した。商業活動の活発化に伴い大資本家が、経済のみならず政治にも影響を与え、政経の癒着の構造を形成して行った。一方で、経済活動の末端では、番社に出入りする通事や番割等が重要な役割を果たし、また、原住民文化にも影響を与えた。

商業の発展が、当時の社会構成に与えていった影響を探るのを第三の視点とした。

第四の視点 官の役割

清朝は台湾経営について、唯一治安維持に重点を置いた以外は総じて消極的で、派遣された官吏もいわば左遷状態であった。結果として派遣された官吏の中には蓄財が目的化し、豪強地主や商業資本と癒着する者もあった。

以上を簡単に整理すると、移民による「農地開拓」は更なる移民を招くというスパイラルの起点となり、人口増は自然発生的に「商業発展」を促した。社会がダイナミックな変化を起こすところには必ず

「利権」が発生し、そこに「官」の腐敗が絡み合って、資本主義社会の悪しき部分である「富の分配の不公平」が生じる。こういった状況下で、住民間の利害共通の集団が生まれ「族群社会」を構成していった。当文は、そのような清代台湾を解析し、今日を映す鏡としてあり出す事を目的としている。

当論文の主要な論点

清代台湾の社会は、漢人と原住民、或いは各族群同士間に於ける対立と共生のモザイク模様でもあった。総じて消極的であった清朝の台湾経営の中で、唯一、治安維持政策は積極的に実行された。その代表的な例は、乾隆十年（一七四五）に福建布政使高山が示した「山沿いの平地に熟番を配置して平野の漢人と山地の生番の間の緩衝装置となしつつ三者の分離を図った」とする、所謂「三層族群制」である。

今日の学説の主流を為すのは、柯志明氏の「三層族群論」に代表される。高山の政策を積極評価する流れであるが、柯志明氏は、三層族群の概念を、官側が「民」を管理する上で、住民を「漢人」と「熟番」、「生番」とに区分し、それぞれの部落の地理的配置を定めた清朝の重要な政策の一つであるとし、その結果熟番の土地が漢人の手に流出したとしている。

移住漢人は少なくとも「閩人」と「粵人」の二つに分類されるが、閩人と粵人は単なる出身地の違いではなく、社会階層として

二分されるものであろうことから、当時の社会を構成する族群は、「三」ではなく、「四」であると最初に主張したい。

私は、今日にも残る「客家部落」の地理上の位置は、殆どの場合「山裾」にあり、「三層論」に述べられている構図とは異なっている点を次に指摘したい。

清代に於ける開拓農地において、開墾の容易な地は「熟番」や「閩人」が住みつき、山麓部の荒地地には「粵人」が住みついた事が分かる。こういったことから、三層論の構図である「官」が「漢」と「生」の間に「熟」を配置したとの認識は地理的に見れば適用が困難であり、もっと別な要因を探る必要がある。

例えば、鳳山県では西部沿岸地帯には「閩人」が、下淡水溪東部には「熟番」が、その東部の山裾には「粵人」が、そして山間部に「生番」の部落が形成され、4ストライプ状の構造が見られる。つまり、先行移民の閩人によって西部沿岸部の開墾がなされ、そこに住居を構えた閩人と、下淡水溪東部において漢人との接触が多く漢化が進んだ「熟番」とが優位な土地を占有した。遅れてやって来た粵人は、既にこの段階では開墾する為の上質の土地はなく、やむなく山沿いの荒地での開墾を余儀なくされたのであるが、言う迄もなく、その土地はどう見ても上質とは言えない地域である。

この配置は先着順とは言え、明らかに農地開墾の容易さ（農地の豊かさ）の順であり、開拓地の質が生み出した豊かさの差の結果、閩人と粵人と間での深刻な亀裂を生み出した。福建布政使高山が提示した

「治安維持の見地から漢人と熟番・生番との区別分離を指向した」とするこの概念の存在は、「机上論的構想」として否定しないが、地理的配置上で論拠を失っており、施行レベルで実効を伴ったものとは言い難く、この点で柯志明氏らの閩粵を一括の漢人とする「三層族群論」は、無理がある

もう一つは、農地開拓と熟番地権に関するものだが、柯志明氏らは、「熟番に属する土地の漢人への流出に、清朝政府が政策的に加担した」との認識をしている点である。

私は、官の植民地経営を支える産業発展は、資本家による組織的な農業基盤整備がそのベースにあり、墾戸・佃戸関係で見られるように、支配者である墾戸と被支配階層である佃戸の存在が、資本主義的な農地開拓の加速と、漢人移住の原動力ともなり、清朝政府はそれを追認していったと考え、結果として清朝による植民地支配を強化したと見る。

つまり、柯志明氏の主張する「清朝が明確な意思で台湾の支配体制を整え、三層族群制を梃子に熟番の土地を漢人に流出させた」と言うよりも、「官の支配体制の維持が目的化し、結果として商業資本と結びついて植民地の経営を進めた」との観点から、「官と商業資本の結びつきの結果として熟番地の大量流出が起こった」。つまり、商業資本と官吏の癒着が決定的な役割を果たしていると結論づけたい。

五層社会モデル

四大族群の分類は、単に民族の出自を基にした概念だけではなく、社会階層として存在していたのは今までも述べたが、四大族群は被支配階層であった「民」の分類でもある。

一方で、政治的支配階層である「官」は「民」の上に位置する立場を最大限利用し、あらゆる手段を使って「植民地」台湾での利益独占に走った。つまり、官吏階層は単なる行政機関に留まらず、経済的にも支配階層に属しており、一つのエスニックグループとして区分されるべきであろう。つまり、当時の社会構造を閩・粵・熟・生の四つの族群に「官」を加えた「五層社会」として表現するのが適切だと考える。それでは、互いに相容れず独立した存在であった五層間の疎通はどのようなになされたのであろうか。

また、エスニック的に分類された各階層は互いに相容れない感情を維持しつつも、各階層に属する人達の絶えざる欲求が、必需品の流通を通じた商業活動を発展させ、多くの移民の生活を支えると共に、結果的にこの体制が植民地機能を強化していったのは間違いないだろう。つまり、現実生活においては、末端の商人が、毛細血管のように末端組織への補給と、各層間の接触を媒介した。これら通事・番割等の末端商人が、住民間の反発感情と物品への希求感情との矛盾解消に一定の役割を果たし、組織的な経済活動を支えた。

当時の社会構造を、五階建てアパートとエレベーターのようなモデルで描いてみた。